

| | |
|------------------|---|
| Title | 一七世紀末ニュー・イングランドのータウンについて： サフィールド（マサチューセッツ）の場合 |
| Sub Title | A New England town in the 17th century Suffield, Mass. |
| Author | 中村, 勝己 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1959 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.52, No.10 (1959. 10) ,p.878(48)- 889(59) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19591001-0048 |
| Abstract | |
| Notes | 資料 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19591001-0048 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一七世紀末ニュー・イングランドの一タウンについて

— サファイールド (マサチューセッツ) の場合 —

中 村 勝 己

アメリカ産業資本の形成とその基礎となる土地制度という観点からみる時、植民地アメリカを次の三つの地域に分けて特徴づける事が出来る。即ち不自由(白人・黒奴)労働に依存する単一商品作物の生産体制としてのプランテーションを基軸とする南部、ヨーロッパのマナーを思わせる大土地所有制をもつ中部、そして独立自営農民を中心とする北部ニュー・イングランド、がそれである。ところで南部ではプランテーションを造出する為に必要な大量の土地(特に人頭権制と売却制を通じ)と不自由労働力は、信用授与を積料として獲得された。棉作プランテーションはこの台木の上に接木されたといつてよいであろう。この様にして構築されたプランテーション制下の南部に於ては、一見「資本主義」的現象が見られても、その生産過程に一たび目を注ぐ時、労働力の再生産はプランター——奉公人乃至奴隷という関係を基軸として行なわれて居た。それ故形

式的には近代的に見えても、実はプランテーション体制の拡張又は補強にすぎず、その基礎にある奴隷労働を自ら破棄する事は出来なかつたと考えられる。中部は色々な意味で南部と北部の中間的形態と考えられる。パトルーンの地主制の問題は実に興味深いが、結局それは自営農民により打倒されて行く。北部は産業資本の播種の地であり、その形成の前提として独立自営農民が広汎に存在し、そしてかかる自由な農民層を創出しそれにより支えられたのが「タウン・システム」である。この様に見てくると、「タウン・システム」こそ、ニュー・イングランドを特徴づけ、アメリカ近代化の歴史的起点をなしたものである事は明らかである。

「タウン・システム」については、今日迄かの地に於ていくつかの研究成果の発表を見ているし、各タウンの地方史や関係史料が少なからず刊行されている。殊にマサチューセッツはコネティカットと並んで、否それ以上に、タウン研究の中心を形成しているかの様である。従来のタウン文書の刊行は、どちらかというといわゆる「旧

タウン」に属するものが多い様に見受けられる。わが国に於ても古くは市村与市氏の「ビュリータン植民史の研究」(昭和八年)に始まり、藤原守胤氏の憲政史的な力作「アメリカ建国史論」二巻(昭和十五年)、玉谷宗市郎氏の「イギリス植民地時代北アメリカ北部土地保有制度の性格」、戦後では仲田光氏の「ニュー・イングランド・タウン共同体分解の前提」、平出宣道氏の「富と民衆」及び近著「近代資本主義成立史論」などを数える事が出来る。アメリカ人による「タウン・システム」の研究は、当然の事ながら、ビュリータンの植民地という点を多かれ少なかれ問題として居り、わが国の市村、玉谷両氏の研究もこの傾向を色濃く示している。この様な傾向自体は、近代的生産力の主体的要因を問題としている限り正当である。又平出氏の研究は、従来の研究書を利用してこれを理論的に整理し、「タウン・システム」を資本主義成立の母胎として、近時の「共同体」論との関聯に於て考えようとしたものである。筆者は、ここで「タウン・システム」を、単に制度乃至形式として、従って又制度的な類似や起原という観点から問題とするつもりはない。或る段階ではその共同体的規制——例えば土地譲渡の禁止・制限、土地利用の規制、手工業者への規制等——が資本主義発展の「桎梏」となった事を認めるが、なお且つ、或いはそれ以前の段階では、この一見「営業の自由」を極度に圧迫した規制こそ、実は南部・中部的な、そしてニュー・イングランド内部の、大プランターの・大地主的・大商人的な「寛容」と「自由」を圧伏し、近代社会成立のたぐ

いない逆説的契機となつたのではないか。後代のそして或る程度迄同時代の「自由」思想にとつては堪えがたく狂信的に見えたこの「不寛容」と「自由の圧迫」こそ、あの「合理化」と「魔術からの解放」を最も徹底的に行ない、産業資本展開の道をはき潜めつつ、自らは急速に「桎梏」と化して行つたのではないか。この様な意味で筆者は、ビュリータンの誓約団体の「共同体的規制」乃至共同性の歴史構成的意義をここで問題としたいのである。こういう観点から筆者はここにマサチューセッツの一タウンの史料をとりあげて、少しく詳細に紹介し、若干の考察をつけ加えてみた。申す迄もなく、我々の問題意識に應える為には、個別タウン研究の蓄積が必要である。本稿はそういう意味での最初の手がかりにすぎない。

(1) Eggleston, Melville, The Land System of the New England Colonies. (Johns Hopkins Univ. Studies, 4th Series, XI-XII, 1886); Andrews, Charles M., The River Towns of Connecticut, A Study of Wethersfield, Hartford, and Windsor. (J.H. Univ. Studies, 7th Series, VII-IX, 1889); Osgood, Herbert L., The American Colonies in the Seventeenth Century, 2 vols., 1904. vol. I; Maclear, Anne Bush, Early New England Towns, A Comparative Study of their Development. 1928; Haller, William, The Puritan Frontier Town-Planting in New England Colonial

Development, 1630—1660. N.Y. 1951.; Harris, Marshall, The Origin of the Land Tenure System in the United States. Ames. 1953. 等をとりあえずあげる事が出来る。

- (2) 夫々の文献末尾の目録などを参照。
- (3) 「社会経済史学」第十四巻第七号、昭和十九年十月。
- (4) 「千葉大学文理学部紀要(文化科学)」第一巻第三号、昭和三十年二月。

(5) Andrews, River Towns. pp. 43, 72; Osgood, I, p. 424 ff.; Eggleston, op. cit., pp. 27—8; Adams, Herbert B., The Germanic Origin of New England Towns. (J. H. Univ. Studies, II. 1882.); Haller, op. cit., p. 26; Weeden, Eco. & Soc. Hist. of N. E., I, p. 59.

- (9) 平出宣道「近代資本主義成立史論」一三八—一四二頁、一五二—一六一頁、二五六—二六〇頁などを参照。
- (7) ここでひとはウェーバーの近代的生産力の構造・本質についての理解を想起すべきである。なお五八頁注(26)を見よ。

二

さて、ここで我々のとりあげるサファイールド⁽¹⁾は、コネティカット河沿いにハートフォードの上流約一五哩の地点にあり、スプリングフィールドの南、ウィンザーの北、エンフィールドの対岸(西岸)に位した。この地域は元来、スプリングフィールドに含まれ、スト

ーニー・リヴァー Stony River あるいはスプリングフィールドの南部という意味でサウスフィールド Southfield ともよばれていた。一七二三年コネティカット植民地に編入される迄はマサチューセツ植民地に属した。以下にいわゆる「リヴァー・タウン」に属するこのタウンの設立事情をさぐって見よう。

一 タウンの設立

マサチューセツ湾植民地の総会は一六六〇年五月三十一日附で、請願者達に六哩平方の土地を、五ヵ年公租免除・四ヵ年以内二〇家族及び有能な牧師一名を入植せよという条件で付与して⁽²⁾。この付与地には直ちに(一六六〇年又は一六六一年)入植が試みられたが、付与の条件をみたす事が出来ず付与は無効となった。それから九年後の一六六九年一月十四日附でスプリングフィールドの行政委員達が可決した一法律は「……(前略)……さて多くの人々の意見によれば、付与され、正しく管理されれば、「ストーニー・リヴァー」は「立派な村落乃至小入植地となるだろう」とし、タウンに対してそれについての考慮をうながし、更に、そこに付与を求め、三〇—二〇エーカーの土地と六—四エーカーの牧草地とをもつ小所有農民(少なくとも五名)の存在に言及している。⁽³⁾翌一六七〇年五月マサチューセツ湾総会にジョン・ピンチオンを筆頭にスプリングフィールドの住民合計十六名の請願者が、この地の入植地としての有望性を述べ、密林地帯の故に入植期間を五—六年としてほしい旨の希望を付して、その付与を請願している。⁽⁴⁾総会では、役員

が、六哩平方を(一六七一年には更に西に一・五哩延長)次の三条件、即ち、第一に植民地用地一〇〇エーカーを別に区割しておく事、第二に、五ヵ年以内に二〇家族を入植せしめ、牧師を獲得し維持すべき事、第三に、各人には約八〇エーカー以上を与えない事、を条件として許可し、次いで、住民の受入れ・土地付与及び細目に互り命ずる為に委員会を指名した。⁽⁵⁾この委員五名中四名は請願者である。併し代議院が否認した為この請願は却下された。それから半歳も経たぬ十月十二日附で総会はこの請願を承認している。⁽⁶⁾

付帯条件は、前述の却下された時のそれと大差はないが、植民地当局用の保留地が一〇〇エーカーの外に更に四〇〇エーカーを加えて五〇〇エーカーに拡大されている点と、一人又は一家族当八〇エーカーをこゆべからずという条項に「少なくとも二〇家族が入植する迄は」という一句が付加されている点が相違している。この中前者は特別に意味があるとは思えない。後者の一句中の「二〇家族」とはタウン設立の為の最低家族数として屢々規定された数字であり、⁽⁷⁾従ってこの一句は「該タウンが独立の社会経済単位として最小限度の基礎を獲得する迄は」という程の意味をもつと考えられ、タウン建設の初期に於て極力衡平と現実入植とが求められた事を示す。併しひとたびこの条件を満たした後は八〇エーカー以上を所有する事を妨げないという事になるから、場合によってはいわゆる「衡平の原則」をいち早く擁護す因子ともなりうるものであり、後に見る様に、⁽⁸⁾僅か数年後の一六七四年には早くも八〇エーカーという最高制

限をしてその拘束力を失わしめたものである。総会に指名された入植委員会は一六七四年「既に若干の家族が入植しているから」、マサチューセツとコネティカットとの境界設立を遅滞なく行なう必要がある旨、又密林地帯なる故租税を七ヵ年免除されたい旨報告している。総会は七ヵ年を四ヵ年に改めた外はこの報告を承認し、ここにタウン設立の外枠は出来上った。そこで以下に我々はこのタウンの建設の中心となる土地制度を検討して見よう。

(1) Sheldon, Hezekiah Spencer (collected, transcribed and published by), Documentary History of Suffolk in the Colony and Province of the Massachusetts Bay in New England, 1660—1749. Springfield, Mass., 1879. First Period, 1660—1682. なる本書は Second Period, 1682—1715; Third Period, 1716—1749 の二巻をあわせて三巻から成るが、筆者の入手出来たのはその中の第一巻のみである。これはシールドンがマサチューセツ湾コネティカットの植民地議会文書、各地のタウン文書・土地文書・遺産目録等を丹念に渉猟し、編纂したものである。

(2) Shurtleff, Nathaniel B., (ed.) Records of the Governor and Company of the Massachusetts Bay in New England. Boston. 1854. (以下 Mass. Col. Rec. と略記) Vol. IV, Part I. 1650—1660. pp. 423—4; Sheldon, Doc. Hist., p. 46. など

収録。

- (c) Sheldon, Ibid., p. 7.
- (4) Sheldon, Ibid., pp. 46-7.

| 氏名 | Land | Wet Meadow |
|------------------|------|------------|
| Samuel Harmon | 30 | 6 |
| Joseph Harmon | 30 | 6 |
| John Lamb | 30 | 6 |
| Benjamin Parsons | 30 | 6 |
| Griffith Jones | 20 | 4 |
| (2人の親子のみに) | 20 | 4 |

- (5) Mass. Col. Rec. IV. Part I. p. 460, Sheldon, Ibid., p. 47. なる Egleston, op. cit., p. 319.
- (7) Sheldon, Ibid., p. 47.
- (8) Sheldon, Ibid., p. 47.
- (9) Mass. Col. Rec. IV. Part I, p. 469.
- (10) これは却下された時の付帯条件の第二に「五カ年以内に二〇家族を入植せしめ」とあるのに照応する。
- (11) Egleston, op. cit., p. 34.
- (12) 第二表参照。
- (13) John Pynchon, Elizur Holyoke, Thomas Cooper, George Colton, Benjamin Cooley & Rowland Thomas, X はビンチオンを含むその三名。

- 五 タウンの土地は若干の区劃に分けられ、各区劃と割当地の間には然るべき幅の公道が、家畜の通過と放牧の便宜の為に設けられる。
- 六 将来の便宜・公益を考え、各人への付与は、付与又は入植から七カ年以内に必要が起れば、各人の付与地内を公道が通過すべき事を明示して行なわれる。但し量質ともに然るべき換地が他の場所に与えられる。
- 七 このタウンの最初の入植者は、自己の付与地の位置を選択する自由を有する。
- 八 昨年十月総会から土地を付与された請願者はすべて、望むならばそこに割当地をもち、来る五月二十日迄にその旨表明し、五月二十日から三年半以内に若干エーカーを買い、改良すべき事。又ここに土地を望み、付与されたすべての他の人は、六ヵ月以内に凡ゆる公益費を支払い、来る五月二十日から三年半以内に、即ち一六七四年十一月二十日迄に、若干エーカーを買い開墾し、その上に家を建てて、そこに住まねばならぬ。然らずんば、委員会はこれを没収し、他の希望者に処分する。……云々。
- 九 被付与・入植者は、その土地を売却・譲渡或いは何らかの方法で処分する以前に、七年間そこに居住乃至入植を続けなければならぬ。

一〇 この地の発展に寄与する様なかなりの土地利用能力即ち資産をもつ人々で、その土地の提供を欲するが自らそこに入植

一七世紀末ニュー・イングランドの一タウンについて

- (14) Sheldon, op. cit., pp. 49-50.
- (15) Sheldon, Ibid., p. 50. なる平出、前掲書五七頁を参照。氏は以上の手続を「典型的な全手続」だとされている。

二 土地制度

(一) 土地配分の原理

まず総会の指名したサフィールド入植委員会が一六七〇—一七二一年(一六七一年)一月十二日附で議決した入植規定の要点を、いさゝか煩雑ではあるが、紹介して見よう。

「一 土地は現在約一〇〇〇の持分地即ち宅地に分割され、宅地は四段階即ち最高八〇、六〇、五〇、最低四〇エーカーに分けられる。牧草地は土地八〇エーカーにつき八エーカー(以下同断)の割合で分配するが、牧草地が極めて不足している為、上記の割合で分配出来ぬかも知れぬ。低沃地・沼地を牧草地と看做して、これを以て代替・補充させる事がある。

二 どんな段階の土地が割当てられるかは、各人の「土地利用能力、資産、有用性及び他の要件」に応じて行なわれる。

三 今後牧草地のみならず、他の土地・森林地及び放牧地の分割が行なわれる場合には、すべて上記の割合で行なわれる。

四 タウン建設費、土地区劃費、牧師の獲得・維持費その他の共同費は、各人の付与地に応じて負担される。凡ての土地付与はこれらの条件の上に行なわれる。

- する気はない人(々)も亦、彼(ら)が委員会の該地に有益だと判断する様な資産を提供する事を約束するならば、付与地と委員会の認める人(々)を彼らの代りに上記の如く入植させておく事を条件として、そこに付与地をもつ事が出来る。
- 一 二 タウンの中心に近い、便利な六〇—八〇エーカーを、最初の牧師の財産として保留すること。
 - 一 三 八〇エーカーの牧師用地は他に売却・譲渡してはならない。又他人に付与してはならない。
 - 一 四 総会用に一〇〇及び四〇〇エーカー合計五〇〇エーカーを区劃すべき事。
 - 一 五 タウンの中心に、教会・校舎・訓練所その他の公共用の土地を二〇—三〇エーカー割当てること。
 - 一 六 製粉場・製材場の設立を奨励する為、各製造場毎に六〇エーカーを、夫々最も便利な地点に与え、水流の便宜、共同地の伐木の自由等を与えること。
 - 一 七 委員会は、該地が許す限り、最初に決定した以上の土地を付与する自由を保留する。かかる土地は最初の付与地より量に於て劣る事があるかも知れぬが、すべてかかる土地は、今後現付与面積に従って分配される。共同費についても然り。
 - 一 八 (省略)
- 右の委員会法令に加えて、丁度その二年後の一六七二—一七三一年一月十日附で「新入植地への入植者を更に奨励する為」追加法令が発

せられているから、ここでその要点をあわせ紹介しておこう。――
『入植を出来るだけ容易にする為、以後人を次の如く三つに分類して扱う事にする。』として

一 請願者。総会から入植地の付与を受けた者又は彼らの資力及び斡旋による如何なる他の善良且つ正直な住民も、一六七五年十月始め又はそれ以前に与えられた土地に入植居住し、少なくとも三カ年居住をつづける事を条件として土地を付与される。

二 資産家。家を建て、土地を開墾し、更に改良を行ない得る者で委員会が付与に応じたならば、次の条件即ち、一六七五年十月一日迄に、少なくとも一〇エーカー土地を開墾して、そこに住居を建て、そこに委員会の認める様な若干の善良且つ正直な住民を入植させ、彼らをして更に三十四年間そこに住まわせ土地を改良させる、という条件で土地を所有する事が出来る。然らずんば付与は無効となる。……云々。

三 資産の少ない被付与者。自身及び家族とそこに入植し、(中略)三十四カ年その土地に住み改良を行なうならば(中略)付与地を所有出来る。付与地をもつ者は凡て前記の条項に従い七カ年間そこに居住をつづけること。

(16) Sheldon, op. cit., pp. 53-57.

(17) Eggleston op. cit., p. 31.

(18) Eggleston, Ibid., p. 35.

担額が「原出資」の大きな割合を占め、配分の規準となつた事は別表(第一表)の通りである。第一表に於て、付与地面積は、ほぼ右の額に比例しているが、土地付与関係の資料によって確認出来ない場合は空欄としておいた。この場合も負担額によっておおよその面積は推定出来るが、同一負担額にも拘らず面積の異なる場合も見られるから推定を避けた。又この表中少なくとも九名は「土地購入者ではあるが入植者ではなかった」点については後に触れるつもりである。現実入植者でない者については、このタウン内の資料は殆んど語る所がない。今後母タウンであるスプリングフィールド、ウィンザー等との照合が特に要請される所以である。

(2) 植民地用地を除けば、教会・学校用地が特に区別され、その譲渡・処分は厳禁されている。そこに原野の中で志を同じくする者と祈りと労働を共にしようとし教育を尊重したピューリタン植民地の面目をうかがう事は許されるのではない。原始林の開拓期の、経済的にも困難の多い時期に、敢て地どりし、しかもタウンへの付与後僅かに一〇年(フィリップ戦争による数年の抛棄期間を含む)を経ずして教会を建設するという事の中には「村の鎮守の神」或いは「伝統主義」の拠点となる寺院・教会などは凡そ異なつた生産的意義があると思なければならぬ。又公益用として製粉・製材場の設立の奨励の為の土地その他の特権を賦与する事は珍しい現象ではないし、その所有者にいわゆる「村抱え」的性質を与える事は事実であるが、その発展の径路や性格については別に考察せねばなら

一七世紀末ニュー・イングランドの一タウンについて

(19) 特に宅地 house lot については嚴重な場合が多い(Eggleston, Ibid., p. 48)。七カ年の例は Meadfield と見出される(Eggleston, Ibid., p. 49)。又 Andrews, River Towns. pp. 71-5.

(20) Sheldon, op. cit., pp. 61-62.

まず前者即ち一六七〇―一七一年の入植規定をとりあげよう。これは、(1) 土地配分の原則、(2) 公益条項及び(3) 定任条項の三つの部分から成る。次に土地配分の原理から検討して見る事にする。

(1) 各人の持分地は、宅地・牧草地・台地などから成り、タウンの異なつた部分に分散していた。この各人の持分地は総額が示されているだけで、「宅地一八エーカーを――通りに所有した」という記録を屢々見出す外にその内訳を知る手がかりはない。牧草地は宅地の一割を原則とするが、牧草地の不足による代替地の問題があるし、又台地もあるから、内訳を確定する事は出来ない。従つて所有乃至経営面積別の内訳も亦不明である。

土地配分の原理は他のどのタウンとも大差なく、「土地利用能力、資産、有用性、及び他の要件」による。即ちタウン建設に当り、個々の入植者がどの程度財政的に(インディアンからの土地購入費・測量費・区割費等を)負担したか、あるいはどの様な能力によって寄与したかが土地配分の規準となつた。特にコネティカット河流域の諸タウン建設に当っては、インディアンからの土地購入費の負

(3) 「定任条項」とは一定の期日以前に一定の改良をしてそこに入植し一定年数居住を続けるという条項をいう。その内容はタウンにより様々であるが、領主的支配や不在大土地所有を憎悪し、禁圧しようとした植民地人の意図を示す点では異なる所はない。そうした意図がどの程度守られ実行されたかは、別個の関聯で論ぜられねばならない。併しこの様な条項が無視されて行く契機は、実に入植規定の中に当初から潜在している。例えば第一〇条の如きは、既に当初からタウン建設の為の出資はするが「自らそこに住む気のない」者と、かかる出資者の下に委員会の承認を得て現実入植する者の存在を、はっきり法的に認めている。この様な現象は他にも指摘されている。この点は次項に於て触れる様に重要な点である。

さて委員会は二年後に追加法令を出している事は既述した。一体「入植を出来るだけ容易にする」必要はどこにあったのであろうか。一六七五年に勃発するフィリップ戦争前の辺境の不安は考慮せねばならないが、入植規定自体の中にも、現実入植を困難にするい

第一表 Pynchon へのインデアンからの土地購入費の償還表

| 番号 | 付与地購入者名 | 付与地面積 (acres) | 購入金額 s. d. | 備考 |
|------|-------------------------|---------------|------------|--|
| 1 | Sawmill | 60 | 1-0-0 | Pynchon 所有。 夫と2人の息子の為に。 Pynchon 所有。Feather. St. にあり。 |
| * 2 | Simon Lobdell | 60 | 1-0-0 | |
| 3 | Lieut. Tyler | | 1-0-0 | |
| 4 | Corwmill | | 1-0-0 | |
| 5 | Samuel Harmon | [50] | 16-8 | |
| 6 | Joseph Harmon | [50] | 16-8 | |
| 7 | Goodm [John] Millington | [40] | 13-4 | |
| * 8 | Joshua Wells. | [50] | 13-4 | |
| * 9 | Benjamin Bartlett | [40] | 13-4 | |
| * 10 | Samuel Dibble | [40] | 13-4 | |
| 11 | Nathaniel Harmon | [40] | 13-4 | |
| 12 | John Hodge | [60] | 16-8 | |
| * 13 | Nicholas Rawlins | | 13-4 | |
| * 14 | Increase Sikes | | 16-8 | |
| 15 | Victory Sikes | [50] | 16-8 | |
| 16 | Robert Old | [50] | 13-4 | |
| 17 | John Burbank | [50] | 13-4 | |
| * 18 | Thomas Morely | | 13-4 | |
| 19 | John Filley | [40] | 13-4 | |
| * 20 | Thomas West | | 13-4 | |
| 21 | Samuel Cross | | 13-4 | |
| 22 | George Jeffery | [50] | 13-4 | |
| 23 | Jonathan Winchell | [60] | 1-0-0 | |
| 24 | David Winchell | [60] | 1-0-0 | |
| 25 | Samuel Taylor | [50] | 13-4 | |

{ 大土地所有者。ピンチモンと共にサワミルドの關
{ 墾・建設に當つた「実業家」

| | | | | |
|------|--------------------------------------|------|---------------|--|
| * 26 | David Morgan | | 16-8 | 30ポンドのホッソンの実、實際入権しなかつたらしい。 Samuel の 13s.4d. (40acres) を含む。 Edward (Sr.), Edward (Jr.), John 及び William が夫々60, 40, 40, 40 acres. 3人の息子が各々 40 acres 追加付与地 |
| 27 | Abraham Dibble | [50] | 16-8 | |
| 28 | Goodm [James] Rising | [50] | 16-0 | |
| 29 | Judah Trumbull | [50] | 16-8 | |
| 30 | Joseph Trumble | [50] | 16-8 } 1-13-4 | |
| 31 | George Norton | [60] | 16-8 | |
| 32 | Nathaniel Cooke | [40] | 13-4 | |
| 33 | Gm Kent | [40] | 13-4 | |
| 34 | Serg ^a . [Anthony] Austin | 100 | 1-6-8 } 2-3-4 | |
| 35 | Gm [?] Allyn | 40x2 | 16-8 } 3-0-0 | |
| 36 | Gm [?] Remington | 180 | 3-0-0 | |
| | | 50 | 2-16-8 | |
| | | 40x3 | 3-4 | |
| 37 | John Pengilly | 10 | 1-0-0 | |
| 38 | Edmund Marshall | [60] | 1-6-0 | |
| 39 | Isaiah Cakeread | [80] | 15-8 | |
| 40 | Joseph Eastman | [50] | 16-8 | |
| 41 | William Prit[?]chard | [50] | 16-8 | |
| 42 | Edward Smith | [50] | 16-8 | |
| 43 | James Barker | [50] | 16-8 | |
| 44 | Thomas Copley | [50] | 1-0-8 | |
| 45 | Nathaniel Che[e]n[e]y | [60] | 1-0-0 | |
| 46 | Gm [?] Roe | [60] | 2-10-0 | |
| 47 | Timothy Palmer | [60] | 16-8 | |
| | 計 | | 41-15-0 | |

- 1) *はピンチモン自身が、「購入者ではあるが、入権者ではない者」として、印したものの。
- 2) 購入者名中「[]」を以て示したのは、他の史料から確認出来た者。[?] は同じく確認出来なかつた者。Gm 又は Goodm は Goodman の略。
- 3) 付与地面積中「[]」を以て示したのは他の史料によって明らかにする事の出来たもの。空欄は他の史料によっても不明なもので、入権しなかつた者(*印)に多い。
- 4) 「備考」欄は第二表の同欄とあわせ参照されたい。

「半島米リナー・ヤンクトン」キャンディ

よう。委員会による入植者の分類Ⅱ類型化はこの点に正にふれてくる。即ち、委員会は、「請願者」及び「資産家」について、彼らの「資力及び輪旋」により、「他の善良且つ正直な住民」を入植させれば、土地を付与するとしている。たとえそこになお定住条項が謳われて居り、又資力の乏しい現実入植者に関する一項があっても、僅々二年のうちには、現実入植主義が修正されねばならなかったという事は、新タウンの建設に当って不在出資者の役割を認めざるを得なかったという事情、又委員会の指導的人物が、外ならぬ請願者の筆頭者・製粉製材業者・商人・大土地所有者ピンチオンであるという事情によるものと見る事が出来る。而してピンチオンは他のタウン建設に当っても同様な役割を演じた事⁽²⁰⁾もここに指摘しておく。勿論史料中の「入植しなかつた者」をすべて不在所有者と見る事は恐らく危険であろう。当時の政情、特に辺境のそれを思えば、単に入植を断念した者もあり得るのではないか。ただ史料上は現在いずれとも断定出来ない。一七世紀末葉の段階では、ピンチオンの動きを以て土地投機業者的なタウン建設者⁽²¹⁾と見る事は、少しく早きにすぎ、様⁽²²⁾に思うが、今後の課題としておきたい。

(21) 各人は「homestead or house lot」・「home lot」・「牧草地」・「及び若干の台地」を所有する事が出来、「持分地はタウンの異なつた地域に分散した三―五個の部分から成つてゐた。」(Sheldon, op. cit., pp. 24—25) なる Osgood, op. cit., I. pp. 436

in, 449; Maclear, op. cit., chap. IV.; Andrews, op. cit., pp. 42—47; Haller, op. cit., pp. 24—27. house lot a home lot ทั่วไปに同義語の様で使用されている (Eggleston, op. cit., pp. 52—53)。

(22) Sheldon, op. cit., pp. 29—45, pp. 57—78.

(23) Osgood, op. cit., p. 456—; Eggleston, op. cit., pp. 47—48. 平出、前掲書八九—九三頁。

(24) 平出、六三頁。

(25) Sheldon, op. cit., p. 20. note.

(26) ウェーバーの余りに有名な「プロテスタントイスマの倫理と資本主義の精神」、「プロテスタント諸派と資本主義の精神」、「経済史」第四篇、「宗教社会学論集」第一巻所収の「序文」、同「世界諸宗教の経済倫理」序論、「儒教と道教」中の「中間的考察」、儒教とピョーリタニズム」などに見られる近代的生産力の主体的要因についての根源的理解、あるいは比類ない深さをもつトニーの「宗教と資本主義の興隆」(出口・越智共訳、上、二〇七—二一五頁)の所論を参照。

(27) 前掲の諸研究の外、平出『ニュー・イングランド植民地に於ける「大土地所有」について』(明治学院論叢 第五二号)を参照。

(28) Eggleston, op. cit., p. 29.

(29) Haller, op. cit., pp. 99—103.; Osgood, op. cit., p. 430 なる。

第二表 サワールド土地付与一覧表 (1670—1682)

| 氏名 | 前前居住地 | 前居住地 | 付与年度 | 付与面積 (エーカー) | 付与条件・備考 | 来住年度 | 職業・公職等 | 転出地 |
|---------------------|------------------------|-------------|--------------------|----------------|---|------|--|--------------------|
| 1 Samuel Harmon | | Springfield | 1670 | 50 | | | 大毛皮業者 selectman, treasurers, land measurer, 民兵将校 タウンの公職に常につく | Springfield |
| 2 Joseph Harmon | | Springfield | 1670 | 50 | | | | |
| 3 Nathaniel Harmon | | Springfield | 1670 | 40 | | | | |
| 4 Zerubbabel Flier | | Windsor | 1670 | 60 | | | | |
| 5 Robert Old | | Windsor | 1670 | 50 | | 1673 | 煉瓦工(?) | 1683年 Windsor |
| 6 Jonathan Winchell | | Windsor | 1671 | 60 | | | | |
| 7 David Winchell | Dorchester | Windsor | 1671 | 60 | | | フレイグ 戦争後 selectman, land measurer | |
| 8 George Jeffries | | Windsor | 1671 | 50 | | | | |
| 9 Robert Watson | | | 1672 | 50 | 入植せず | | | |
| 10 John Watson | | | 1671 OR 1673 | 50 | この外文の付与地の一部を相続す。 | | | |
| 11 John Millington | | | 1672 | 40 | Th. Copley に売却。 | | | |
| 12 Steven Taylor | | Windsor | 1672 | 60 | | | | 1685年 Windsor |
| 13 John Taylor | | Windsor | 1672 | 50 | | | | 1688-9年 Windsor |
| 14 Nathaniel Cook | | Windsor | 1672 | 40 | 入植しなかつたらしい。 | | | |
| 15 Timothy Hale | | Windsor | 1673 [1682] | 60 [2] | [追加付与] 117. | 1679 | | |
| 16 Josiana Wells | | Windsor | 1674 | 50 | 入植せず | | | |
| 17 John Filley | | Windsor | 1674 | 40 | | | | |
| 18 Hugh Roe | Weymouth | Hartford | 1674 | 60 | 後に内10acresを Stephen Taylor に付与する。 | 1674 | Hartford の sealer of leather | |
| 19 Thomas Spencer | 英 Essex Cam- bridge | Hartford | 1674 | 60 | | | | |
| 20 Judah Trumble | | | 1674 | 50 | | 1676 | | |

| | | | | | | | | | |
|----|--------------------------|-------------------------------------|-----------------------------------|----------------|------------|--|---------|--|---------------------|
| 15 | Timothy Hale | | Windsor | 1673 [1682] | 60 [2] | [追加付与]*117. | 1679 | | |
| 16 | Joshua Wells | | Windsor | 1674 | 50 | 入植せず | | | |
| 17 | John Filley | | 1674 | 1674 | 40 | | | | |
| 18 | Hugh Roe | Weymouth | Hartford | 1674 | 60 | 後に内10acresを Stephen Taylor に付与する。 | 1674 | Hartford の sealer of leather | |
| 19 | Thomas Spencer | 英 Essex Cam- bridge | Hartford | 1674 | 60 | | | | |
| 20 | Judah Trumble | | | 1674 [1682] | 50 [10] | [追加付与]*115. | 1676 | | |
| 21 | Joseph Trumble | | | 1674 [1682] | 50 [10] | [追加付与]*114. | 1674 | | |
| 22 | Edward Smith | 英 Hampshire →Charlestown | Ipswich (?) | 1674 | 50 | | 1674 | (父は任立屋) 民兵将校 selectman | |
| 23 | Anthony Austin | | Rowley | 1674 | 50 | | | | |
| 24 | Timothy Palmer | | | 1674 [1682] | 60 [10] | [追加付与]*113. | 1677-80 | | |
| 25 | Walter Holliday | Weymouth | Springfield | 1674 | 40 | 死後兄弟Peterへ | | | |
| 26 | Samuel Roe | Hartford(?) | Hartford(?) | 1674 | 50 | | 1674 | selectman | |
| 27 | Abram Dibble | Boston | Haddam | 1674 | 50 | | 1680頃 | 大土地所有者。 「実業家」。ピンチ ジョンと共にタウン 建設に当る。 selectman | |
| 28 | John Burbank | | Haverhill | 1674 | 50 | | 1684 | deacon | |
| 29 | John Barber | Windsor | Springfield | 1674 | 50 | | | | |
| 30 | Thomas Barber | Windsor | Newberry | 1674 | 50 | | | | |
| 31 | George Norton | Gloucester Salem | Ipswich | 1674 | 60 | | 1674 | inn-keeper selectman, 民兵将 校, 総会への代議員 | |
| 32 | Thomas Remington | Newberry, Rowley | Windsor | 1674 | 60 | | 1675-7 | | |
| 33 | Launcelot Granger | Ipswich | Newberry | 1674 | 60 | | 1674 | land measurer | Newberry |
| 34 | Thomas Granger | | | 1674 | 40 | | | | |
| 35 | George Granger | | | 1674 | 40 | | | | |
| 36 | John Hodge | | Killingworth | 1674 | 60 | 永く留まらず | | | |
| 37 | Samuel Kent, Sr. | 英生れ。 Gloucester | Brookfield | 1676 [1682] | 60 [6] | [追加付与]*116. | 1678 | selectman | Springfield |
| 38 | Thomas Parsons | | Springfield(?) | 1676 | 50 | | 1679以前 | | 1686 Springfield |
| 39 | James Barker | | | 1676 | 50 | | | | |
| 40 | James Rising | 英 London→ Bermudas→ Salem→ | Windsor (渡船場経営) | 1676 | 50 | | 1679 | | Simsbury |
| 41 | Benjamin Dibble | | | 1676 | 40 | Joseph Shel- don に売却 | | | |
| 42 | Thomas Remington, Jr. | Rowley | Windsor | 1676 | 50 | | | | |
| 43 | Isaac Cakebread | Weymouth | Springfield ナイリッ に宛軍 に宛軍 | 1677 | 50 | | | | Hartford |
| 44 | Timothy Eastman | Salisbury | | 1677 | 50 | | | | |
| 45 | Joseph Eastman | Salisbury | Hadley | 1677 | 50 | | | 製皮工 | Hadley |
| 46 | John Lawton | | Ipswich | 1677 | 60 | | 1677 | | |
| 47 | Thomas Copley | Springfield | Westfield | 1677 | 60 | *John Milling- ton から 40 ac- res 購入] | 1679 | constable その他 の公職 | |
| 48 | Thomas Taylor | | Windsor | 1677 | 50 | | | | |
| 49 | Thomas Huxley | | Hartford | 1678 | 60 | | 1678 | Public House for Entertainment の keeper その他主要な公職 若干。 | |
| 50 | Edward Burlison | | | 1678 | 40 | | | | |
| 51 | Peter Roe | | | 1678 | 40 | 父・兄弟の付与 地 60+50=110 acresを遺贈さる | | | |
| 52 | John Severance | Salisbury | Deerfield | 1678 | 50 | | 1678 | 渡給場所有 | |
| 53 | John Pengilly | Wales 又は Cornwall の Ipswich | ナラガンセット 遠征隊騎兵隊長 (1675) | 1678 | 60 | | | | |
| 54 | Edward Allyn, Sr. | Scotland. ク ア=ル軍兵士 Dedhamに在住→ | Ipswich | 1678 | 60 | その estate は £256. | 1679 | | 1684 Deerfield |
| 55 | Edward Allyn, Jr. | | Ipswich (?) | 1678 | 40 | | | | |
| 56 | John Allyn | | Ipswich (?) | 1678 | 40 | | | | |
| 57 | William Allyn | | Ipswich (?) | 1678 | 40 | | | | |
| 58 | John Scott | | Springfield | 1678 | 60 | | | | |
| 59 | James King | | | 1678 | 60 | | | | |
| 60 | Samuel Bush | | | 1678 | 60 | | 1678 | 補工 | Westfield |

| | 氏名 | 前居住地 | 前居住地 | 付与年度 | 付与面積 (エーカー) | 付与条件・備考 | 来住年度 | 職業・公職等 | 転出地 |
|-----|-------------------------|--|---|------|----------------|---|----------------|--|------------------------|
| 61 | Joseph Segar | | Windsor | 1679 | 40 | | | | |
| 62 | John Remington | Rowley | | 1679 | 40 | | | | |
| 63 | Jonathan Remington | | | 1679 | 40 | | | | |
| 64 | Richard Austin | | | 1679 | 40 | | | | |
| 65 | Anthony Austin, Jr. | | | 1679 | 40 | | | | |
| 66 | Samuel Kent, Jr. | | | 1679 | 40 | | | | |
| 67 | Thomas Hanchett | 1649 Wetherfield 1651 New London 1660 Northampton | Westfield | 1679 | 60 | | | deacon | Westfield Roxbury |
| 68 | Thomas Hanchett, Jr. | | Westfield | 1679 | 40 | | | 多くの公職, deacon | |
| 69 | John Hanchett | | Westfield | 1679 | 40 | | | | |
| 70 | David Froe | | Northampton (Irish servant) Springfield | 1679 | 40 | | | | |
| 71 | Obadiah Miller | | | 1679 | 50 | | | | |
| 72 | Daniel Canada | | | 1679 | 50 | Eben. Burbank の所有に購す | | | |
| 73 | Simon Gowin | | | 1679 | 60 | | | | |
| 74 | John Younglove | Ipswich (?) | Hadley (教員) | 1679 | 80 | 特別付与(牧師) | 1680 | 最初の牧師 | |
| 75 | William Pritchard | | | 1679 | 50 | | | | |
| 76 | Michael Towsley | | Salisbury フイリッパ戦争 に従軍 | 1679 | 50 | | 1680 | | |
| 77 | John Rising | | Windsor (?) | 1679 | 40 | | | | |
| 78 | Edmund Marshall | | Newbury | 1680 | 80 | | 1682-5 | 船大工 | |
| 79 | Richard Woolley | | Newberry | 1680 | 60 | | 1684 | 織布工 | |
| 80 | John Higgins | | Newbury | 1680 | 50 | | 1681頃 | | 1688-91 Springfield |
| 81 | James Barlow | | Springfield (Pynchon の servant) | 1680 | 50 | 永く留まらず | | | |
| 82 | James Taylor | | Springfield (sealer of leather) | 1680 | 50 | 永く留まらず | | | |
| 83 | Luke Hitchcock | | | 1680 | 50 | | | 1722. Sheffield (Mass.) のタワソ 設立請願者。入権 委員 29と同一人物か(?) | |
| 84 | John Barber | | Springfield | 1680 | 50 | 入権せず(?)。に インデミアンに よる家族殺害の 補償地として。 | 1682 | 大工 請願者 Richard Sicks の息子 | Deerfield |
| 85 | Samuel Taylor | | Springfield | 1680 | 50 | | | | |
| 86 | Jonathan Taylor | | Springfield | 1680 | 50 | | | | |
| 87 | Thomas Cooper | | Springfield | 1680 | 50 | | | | |
| 88 | Victory Sikes | | Springfield | 1680 | 50 | | | | |
| 89 | William Brooks | | Springfield | 1680 | 50 | | | | |
| 90 | Ebenezer Brooks | | Springfield | 1680 | 40 | | | | Deerfield |
| 91 | Nathaniel Cheaney | | Springfield | 1680 | 60 | | | | |
| 92 | Gregory Gibbs | Windsor | Springfield | 1680 | 40 | | 1683又は それ以前 | | Hadley |
| 93 | Samuel Lane | Mass. 東部から の一兵士(1676) | 1677. Hadley | 1680 | 40 | | | | |
| 94 | John Mighel | | | 1681 | 60 | 永く留まらず | | | |
| 95 | John Mighel, Jr. | | | 1681 | 40 | 同上 | | | |
| 96 | Thomas Mighel | | | 1681 | 40 | 同上 | | | |
| 97 | Thomas Stevens | | Newberry(?) | 1681 | 50 | 入権せず(?) | | | land measurer |
| 98 | John Ingersoll | | Westfield | 1681 | 50 | 入権せず(?) | | | |
| 99 | John Ingersoll, Jr. | | Westfield | 1681 | 50 | | | | |
| 100 | James Smith | | Moseley corn- pany に所属 | 1682 | 50 | 入権せず | | | |
| 101 | Ministry Land | | | 1682 | 20 | 多くの人に短期 貸地 同上 | | | |
| 102 | Ministry Land | | | 1682 | 60 | 父の grant を 受く 死亡。Pynchon (2d) に所有さる 委員としての奉 任に対し | | | |
| 103 | Samuel Glover | | | 1682 | 60 | 同上 | | | |
| 104 | Joseph Pynchon | | | 1682 | 80 | 同上 | | 医者 (ヘンリー ド大卒) Wm. Pyn- chon の息子 請願者, 委員 | |
| 105 | John Pynchon | | | 1682 | 80 | 同上 | | 請願者, 委員 | |
| 106 | Benjamin Cooley | | | 1682 | 50 | 同上 | | 請願者, 委員 | |
| 107 | George Colton | | | 1682 | 50 | 同上 | | 請願者, 委員 | |

| 番号 | 氏名 | 居住地 | 年 | 面積 | 備考 | 氏名 | 居住地 |
|-----|----------------------------|----------------|------|--------|----------------------------------|-------------------------------|------------|
| 101 | Ministry Land | Party (不明) | 1682 | 20 | 多くの人に短期貸地 | | |
| 102 | Ministry Land | | 1682 | 60 | 同上 | | |
| 103 | Samuel Glover | | 1682 | 60 | 父の grant を受け | | |
| 104 | Joseph Pynchon | | 1682 | 80 | 死亡。Pynchon (2d) に所有する委員としての奉任に対し | 医者 (ハーヴェー・大卒) Wm. Pynchon の息子 | |
| 105 | John Pynchon | | 1682 | 80 | 委員としての奉任に対し | 請願者, 委員 | |
| 106 | Benjamin Cooley | | 1682 | 50 | 同上 | 請願者, 委員 | |
| 107 | George Colton | | 1682 | 50 | 同上 | 請願者, 委員 | |
| 108 | Rowland Thomas | | 1682 | 50 | 同上 | 最初の校長, 委員 | |
| 109 | William Trowbridge | New Haven | 1682 | 50 | | | |
| 110 | Thomas Trowbridge | New Haven (?) | 1682 | 40 | 入植せず | | |
| 111 | Thomas Cooper | | 1682 | 300r35 | 生涯に亘り委員としての奉任に対し。10年免状 | 委員 | |
| 112 | Elizur Holyoke | | 1682 | 300r35 | 同上 | 請願者, 委員 | |
| 113 | Timothy Palmer | | 1682 | 10 | →24. (60 acres) | | |
| 114 | Joseph Trumble | | 1682 | 10 | →20. (50 ") | | |
| 115 | Judah Trumble | | 1682 | 10 | →21. (50 ") | | |
| 116 | Samuel Kent, Sr. | Brookfield | 1682 | 6 | →37. (60 ") | | |
| 117 | Timothy Hale | | 1682 | 2 | →15. (60 ") | | |
| 118 | School Lot | | 1682 | 40 | 入植せず (?) | | |
| 119 | Joseph Leonard | Springfield | 1682 | 40 | | 大工。ピンチョンに雇われ建築。 | |
| 120 | Joseph and Benjamin Barber | | 1682 | 40 | 双生児 | | |
| 121 | John Petty | Northfield (?) | 1682 | 60 | 条件附付与(3カ年以内に入植)。入植せず | | Northfield |
| 122 | Samuel Flier | Windsor | 1682 | 40 | | | |

- 1) 「氏名」欄の氏名には異なった綴りも見られる。
- 2) 「前居住地」とは次欄のサファイールドに在住する以前の居住地より更に古い居住地を凡て含む。それ故、「前居住地」の直前の居住地とは限らない。「前居住地」についても同様。最右欄の「転出地」と共に以外に移動の激しい事を示す。
- 3) 「付与年度」「付与面積」及び「付与条件・備考」欄の「」は、該被付与人に別口の付与地がある事を示す。(→印の右の数字は、本表左端の付与番号を示す。)

(30) 平出、前掲書、一五二—一七四頁。特に一六一頁以下を見よ。

以上に於て私は入植規定自体、あるいはその変化のうちにタウン建設の諸問題をさぐり出そうとした。次に、そうした規定の下において現実などの様な入植状況が現出したか、という問題を考えて見よう。別表(第二表)はシェルダン編の史料集の中から作成した、一六七〇—一六八二年に到る十三年間の被付与者の一覧表である。各欄については表の下端の注を参照していただく事にする。入植者は、一瞥して明らか様な様に、大体コネティカット河流域の諸タウン(「いわゆる「リヴァー・タウン」」特にウィンザー、スプリングフィールド、ハートフォード及びウェストフィールド等の周辺タウンから来ている。而してこうした移住の仕方はニュー・イングランドの新タウン設立の場合に共通に見られる現象である。「付与年度」の欄で一六七五—七年度にかけて著しく付与件数が減少しているのはフリップ戦争期のインディアンの脅威によるものである。さて付与地に関する欄について、まず付与面積は殆んど四〇、五〇、六〇エーカーの三段階のいずれかである。しかもこの面積は、地味・種類・距離等の諸条件を考慮すれば、実質的にはかなり「衡平の原則」が貫いていたのではないかと思われる。併し一六八一年度ともなると、こうしたいわば「持分の斉一性」を創出する付与とは異なった兆候が現われ始める事に誰しも気付くであろう。同時に亦、「永く留まらず」とか、「入植せず」とか、あるいは又請願者・入植委員会

委員等の貢献・奉仕に対する褒賞の意味の付与地、更には追加付与地とかの記載が顕著になって来る。ところで史料集の末尾に収録されている委員会の土地付与記録を見ると、右の様な付与の場合、例えば105のジョン・ピンチョンの八〇エーカーの場合の様に、「そこに家屋一戸を建て、約四カ年以内に八一〇エーカーを改良する事を条件として」といったたぐいの付帯条件がわざわざ付されているのを所々見出す。これらの諸事実を考えると、サファイールドの土地配分の原則は、一六八〇年あたりを境に変わり始めるのではないかと推定したのである。さきにも触れたが、請願者・委員層は必ずしも単一タウンにのみ関係したのではなく、総会の有力者としていくつものタウン設立に関係している。ピンチョン家の如きはその好例である。その様ないくつものタウン設立に関係する事によって得られる経済的・社会的・政治的利益は決して無視出来ない程の意義をもつ筈である。

(16) Sheldon, op. cit., pp. 75—78.

(32) ただし前にも述べた様に、誠に遺憾ながら、筆者の利用出来たのは、シェルダン編のサファイールド史料集三巻中の第一巻(一六六〇—一六八二年)のみであり、ここに指摘した最も興味ある問題は、僅かにその緒をうかがうのみに終っている。それ故、第二、第三巻を利用出来る日迄はこれ以上の断定は避けたい。